慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	慶應義塾図書館蔵「泉鏡花生母すゞの書簡」解題・翻刻（上）
Sub Title	慶応義塾図書館蔵「泉鏡花生母すゞの書簡」解題・翻刻（上）
Author	西川, 貴子(Nishikawa, Atsuko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2000
Jtitle	三田國文 No.32 (2000. 9) ,p.75- 88
JaLC DOI	10.14991/002.20000900-0075
Abstract	
Notes	図削除
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20000900-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾図書館蔵「泉鏡花生母すゞの書簡」解題・翻刻（上）

西川　貴子

解題

ここに紹介する二通の書簡は、金沢市下新町に住む、泉鏡花の母、すゞが高岡に出稼ぎに行った夫、清次に宛てたものである。いずれも慶應義塾図書館所蔵のもので、この二通を含めて四通の清次宛書簡が所蔵されている。

太田咲太郎「図書館案内」（『三田評論』一九三一・一一、一九三二・九）に泉家から鏡花の遺品や自筆原稿が慶應義塾図書館へ寄贈されたことが記されているが、これらの書簡はその際、遺品の中に含まれていたものと考えられる（遺品は現在は「鏡花室」に保管されている）。

ここでは便宜上、四通の書簡を、書かれた年次にしたがって「書簡一」〜「書簡四」と呼ぶことにする。本稿で紹介する「書簡一」「書簡二」、及び次号で松井崇、三浦卓両氏によって紹介される「書簡三」の三通は、内容上、同時期に書かれたものと推定できるが、同じく次号で紹介される「書簡四」は、それらよりも数年後のもので、鏡花出生後に書かれたと推測される。

また「書簡二」は鏡花自らが編纂に関わった春陽堂版『鏡花全集』巻十五（以下「春陽堂版全集」）に、その一部（後半の「すこしのまもわすれ」から「何も〳〵目出度かしく」まで）の写真と翻刻が掲載され、併せて、清次が打ったと思われる簪の写真と、鏡花による左記の言葉が添えられており、書簡が書かれた当時の状況を伝えている。

父が刻みし平打の簪、
牡丹一枝、ゆかしき人のさしけるが、いまわがもとにあり。
母とし十九の頃、職を隣国高岡に営みし父に寄せたるおとづれ、
金沢新町より。

鏡花の母すゞは安政元（一八五四）年一月二十八日、加賀藩御手役者葛野流大鼓師、中田万三郎豊喜の長女として、江戸下谷で生れた。『稿本金沢市史　風俗編第二』（復刻版・名著出版一九七三・七）によると、加賀藩では「藩主前田氏歴世能楽を好尚し、その上下に行はれた」とある。藩内では「御手役者は皆俸米を給せられ、町役者は扶持米を給せらるゝものと否らざる

ものとあり」、藩主斉広・斉泰の時には中田万三郎家は江戸で判金四枚の俸給を受けていた（同書）。

しかし上野で彰義隊と官軍との戦闘が行われた慶応四（明治元）年、中田家もついに江戸を離れ、金沢へと転住したことが「金沢市高道町の全性寺の過去帳」や「壬申戸籍」の文章から確認できる（殿田良作「泉鏡花の実際と作品」『国語国文』一九六三・七）。すゞと清次がいつ結婚したのかは明らかではないが、「壬申戸籍が作成された明治五年にはすでに入籍」していた（殿田前掲論文）。

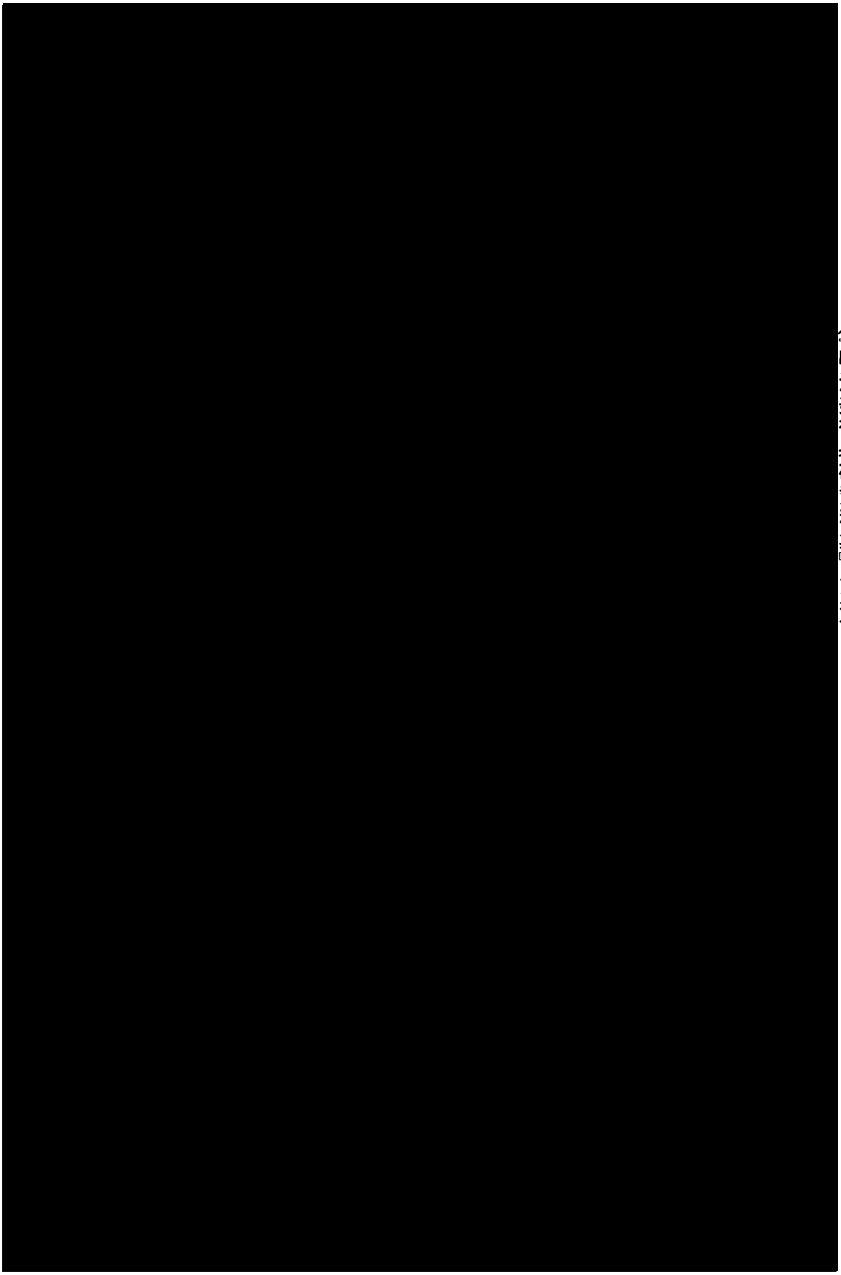
後述するように、二通の書簡はともに明治六（一八七三）年六月執筆と推定されるが、泉鏡太郎（鏡花）の出生が明治六年十一月四日であり、「書簡二」の本文中にも「たゞのからだに候へはどうでもいたし御めもじにまいり候へともこういうからたに候間其よふな事もてき不申」とあるように、この「書簡一」「書簡二」「書簡三」を書いた時、すゞは鏡花を身籠っていた。ちなみに、泉家の菩提寺、金沢市馬場五番丁の円融寺過去帳には「明治五年七月晦日　冥敢水子　泉清次子息」とあり、鏡花誕生前にも既に一子あったが、流産か死産したと思われる（殿田前掲論文）。

鏡花の父、泉清次は天保十三（一八四二）年十一月三日、泉庄助（「庄次」とする論文もある）、きての長男として生れた。清次は父の仕立職を継がず、加賀藩細工方、金工七代目水野源六（光和）に弟子入りし、春陽堂版全集巻一の年譜に「父は清次、政光とて金属の彫工なり」とあるように、政光という号を名乗った。

小林輝治「加賀象眼の職人たち――鏡花の諸作を一つの視点として――」（『ホワットイズ・金沢――職人・作家・商人のルーツを探る』金沢学研究会　黒川威人編一九九二・二）等でも既に指摘されているように、清次は明治十四（一八八一）年開催の第二回内国勧業博覧会に銅製の香爐を出品しており〈資料1〉、「朧銀ノ香爐ニ諸金属ヲ以テ古紋ヲ平嵌ス布置宜キヲ得テ鮮麗ナリ其工技頗ル嘉ス可シ」という評を得ている（東京国立文化財研究所美術部編『明治美術基礎資料集』一九七五・三）。なお、清次の作品は、小林前掲論文で写真と共に紹介されている。

『稿本金沢市史　工芸編』（復刻版・名著出版一九七三・七）によると、江戸時代には、豊臣氏滅亡後、京摂及び伏見から来て前田氏に仕えるようになった後藤氏や大坂から来た水野氏、伏見から来た勝木氏を初め、金沢の金属雕鏤の業は盛んであった。加賀藩では、当時これらの工人を、白銀師と、象嵌の工人である鐙師（象嵌師）の二つに分けており、水野氏は白銀師に属したが、「白銀師と象眼師は漸次その業を混同して、互にその技を兼ね」るようになり、「遂に系統さへも識別し能はざるに至」ったのである。

「美術工芸の府金沢」と称されたように、加賀前田家は文化政策を強力に推進し、「領内外から広く人材を集め、美術工芸と武具補修の細工所を設けた」（養田実・定塚武敏編『高岡銅器史』桂書房一九八八・五）。「町職人が細工人に任命されることは職人社会における最高の名誉」で、「門閥御用職人として苗字帯刀を許され」、扶持米・給米を受けることができ、「一たん、細工人ともなれば日々齷齪としてわが技を安く売る必要はなく、ひ



〈資料1〉「第二回内国勧業博覧会（明治十四年）出品目録」
（『明治美術基礎資料集』前掲）

たすら技術の練磨につとめ秀れた作品の製作に没頭すればよかった」のである（田中喜男『加賀象嵌職人――米沢弘安の人と作品――』北国出版一九七四・二）。

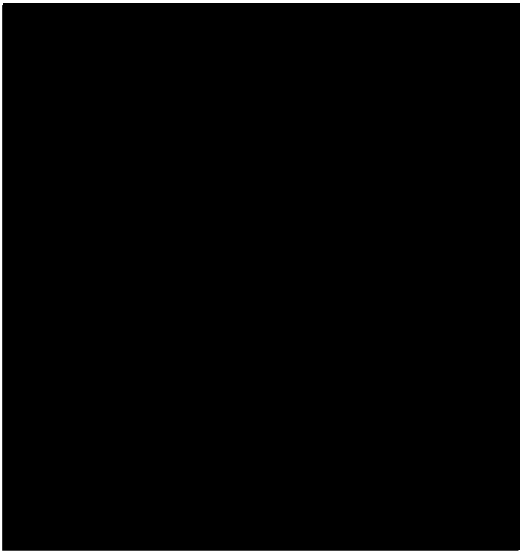
しかし明治維新によって幕藩体制が崩壊し、明治二（一八六九）年帯刀禁止令、同五（一八七五）年廃刀令などにより刀剣装具の需要が断たれ、加賀象嵌は決定的な打撃を受ける。

だが、高岡の鋳物師や飾師たちは幕藩体制下で町人や農民を商売相手としていたため、ほとんど打撃を受けず、むしろ「北陸地方はもとより、関西、関東、東北、九州、さらには居留地貿易にまで販路を拡げた銅器商人の台頭によって発展的でさえあった。そこで廃藩によって失業した数多くの加賀象嵌師が、高岡へ出稼ぎにくる事態が起った」（『高岡銅器史』前掲）。清次もそのうちの一人で、『金沢銅器製造元記』（金沢市立玉川図書館蔵）によると明治六年三月から、高岡の白崎屋へ出稼ぎに行ったことが記されている〈資料2〉。

したがって、書簡自体に年号は記されていないが、「書簡一」～「書簡三」は明治六年に書かれたものと推定することができる。ただし、高岡滞在も一時のことであり、明治六年八月、高岡の銅器商人金森宗七が、新たに金沢で「宗金堂」と称する銅器製造工場を設立した時には清次はその仕事に参加しており、半年も経たないうちに金沢に戻ってきたものと考えられる（『金沢銅器製造元記』には「泉清治」と記載されているが、前後の記述からこれは「泉清次」のことを指す）〈資料3〉。

以上のように、本資料は鏡花誕生前のものであるが、春陽堂版全集収録に際して鏡花自ら言葉を添えるなど深い思い入れを示していたことや、「聾の一心」（明二八・一）を初め、父をモデルに書いたと思われる作品もいくつかあること、また周知の通り鏡花の作品世界に「母」の存在が大きな影響を及ぼしているにもかかわらず写真を初めとして母の姿を伝える具体的な資料がないことなどを考えれば、父母の間の直接の交信の記録である本書簡は鏡花文学研究にとって重要な資料といえる。同時に、鏡花出生直前の同時代の周辺状況を知る上でいくつかの興味深い事実も散見でき、その意味でも貴重なものだといえよう。

〈資料2〉『金沢銅器製造元記』（金沢市立玉川図書館蔵）



[redacted]

書誌

翻刻にあたって、慶應義塾図書館所蔵の清次宛すゞ書簡四通に、便宜上、日付順に「書簡一」～「書簡四」と番号を付した。今回紹介するのはそのうち左記の二書簡である。

「**書簡一**」

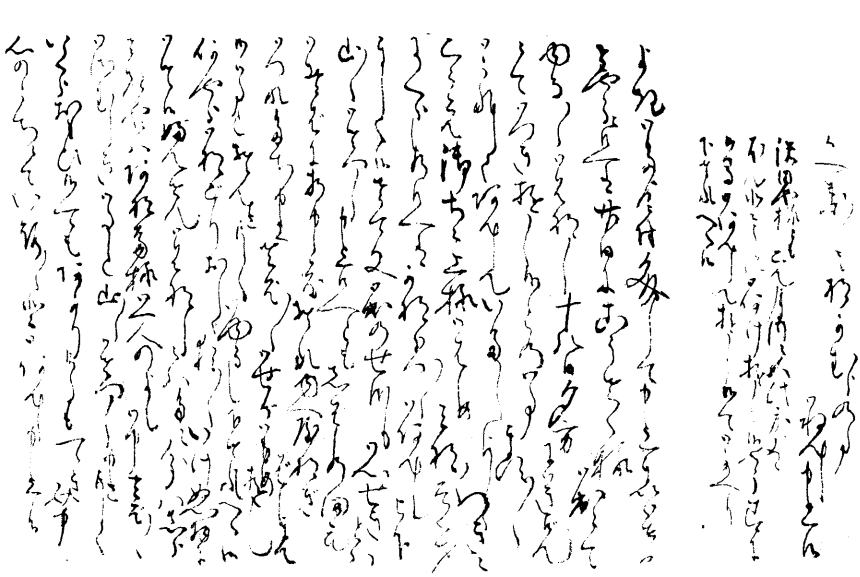
・［明治六年（推定）］六月二十二日
・巻紙、薄手斐楮交漉三枚継
・（縦×横）一五・三×七四・六（cm）
・墨筆（四十二行・別に差出人署名、宛先、日付共六行・「猶々書」二十行）

「**書簡二**」

・［明治六年（推定）］六月二十四日
・巻紙、薄手斐楮交漉四枚継
・（縦×横）一五・三×八六・二（cm）
・墨筆（五十五行・別に差出人署名、宛先、日付共六行・「猶々書」十六行）

凡例

一、翻刻にあたってはできるだけ原文に忠実に努め、書簡特有の文字（例：「ゟ」）は原文のままとしたが、変体仮名は原則として通行の仮名に改めた。
一、本翻刻は〈書簡写真版〉〈本文翻刻〉〈注〉により構成されている。

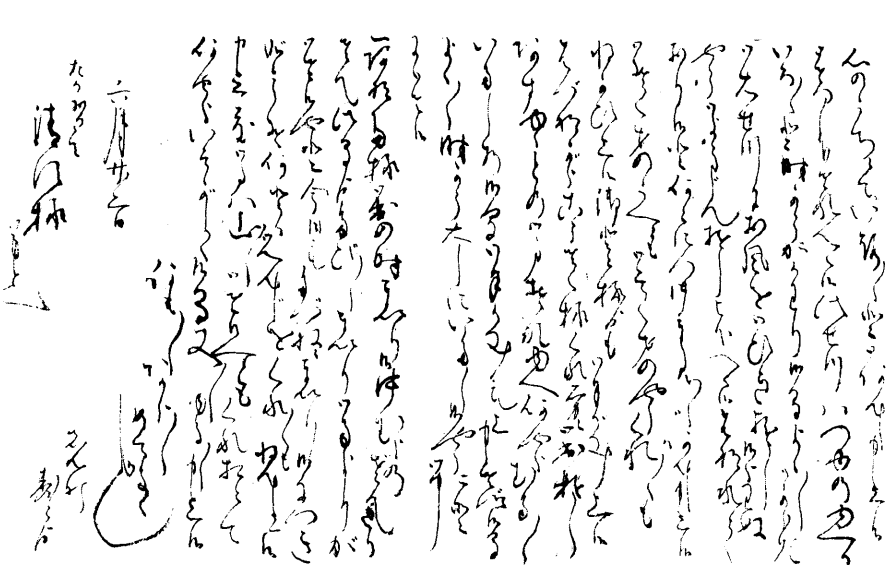


翻刻

「書簡一」

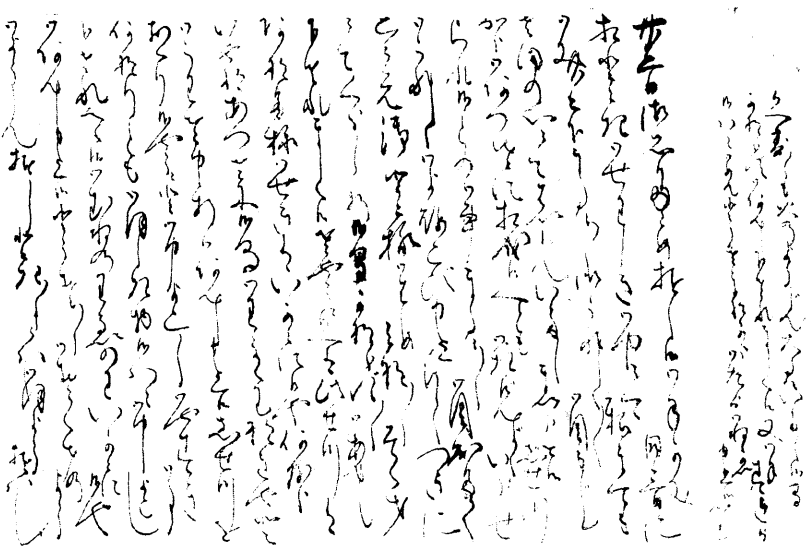
かへす〳〵もなかむら[1]の事御ねんし申上候
沢田や様にもこん月内には此度は[2]
ほんとうに御あけ遊し候やうすに
候間御あんしん遊し候て御かへり
下されへく候

よき御たゝに付文して申上まいらせ候
さやうに候へは二十日にこうさく様[3]御出にて
ゆる〳〵御はなし十八日夕方に御きげん
にて御つき遊し候との御事まし〳〵
御うれしくあんしんいたしまいらせ候つきに
こゝ元御ちゝ上様[4]御はしめみな〳〵そく才
にくらし折候へはかならつ〳〵御あんし被下
ましく候さて又御出のせつも御心せきとは
山〳〵御さつし申上候へともしばしのまも
御そばに折申候度それゆへ屋なぎばし[5]まて
御つれたち申上さぞ〳〵御せが御もめ遊し[6]
候御事とそんし上まいらせ候御ゆるし下されへく候
何やら御なごりおしく猶〳〵いけぬ物に
御さ候ぶんさん[7]御はなしにはたゝ今はしら
さきやにはあなた様御一人のよし御申さぞ〳〵[8]
御さむしき御事と山〳〵御さつし申上まいらせ候
いくらおもひ候てもあかり候事もてき不申



心のうちにていろ〳〵と御あんし申上候
御さつし下されへく候此せつはつゆのゆへに
いろ〳〵と時かうがかわり候間よく〳〵御からだ
御大せつにお風を御ひき遊し候らわぬ
やう御ようじん遊し被下へく候はなれて
おり候と何[9]につけま事に〳〵あんし申上候
御そく才のうへにも御そく才のやうくれ〳〵も
ねかひ上候御とゝ様〻も御手がみ上候
はづながらこうさく様くれ方に御出遊し
あすゆくとの御事それゆへ何やらむた〳〵
いたし折候間御手かみも上申さず候間
よく〳〵時かう大しにいたし候やうにと御申
に御さ候
一[10]あなた様御出の時まいり候中むらのざんぎり
さん此間〻たび〳〵まいり御たよりが
御さ候やと今日もたづねにまいり候につき
どうそ何とか御へんじをくれ〳〵もねんし上候
申上度御事は山〳〵御さ候へともくれ相にて
何やらいそがしく候間又〳〵ゆる〳〵申上候
何も〳〵あら〳〵めでたくかしく
六月廿二日[12]　志ん町[11]
たかおかにて[13]　すゝ〻
清次様
御もとへ

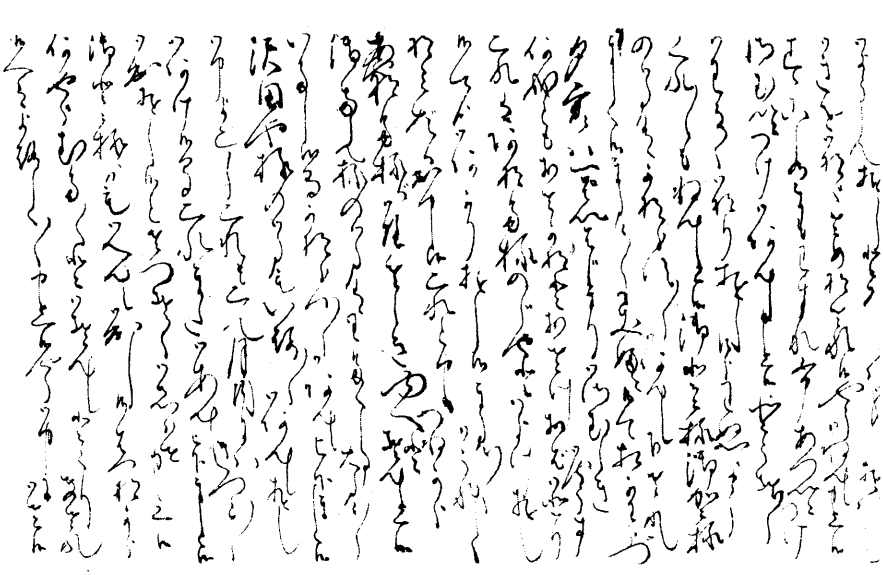
猶〳〵時かう御いとゐ遊し候やうねかひ上候
くれ〳〵も御からだ御大事に遊し御たべ物
御きつかひ御さけをあまり〳〵御すごし
遊し候らわぬようねんし上まいらせ候こゝ元
あなた様御出のばんゟさかゐやにてそば
おはじめ申候山のそば出みせと申候
大そう〳〵おゝきい町ちんをつけよく〳〵
はやり申候十九日のはん御はゝ様[14]とちよと
たへにまいり候所ま事に〳〵おいしいおそばに
御さ候あなた様御内なれはさそ〳〵御よろこひ
さつそく御出遊し候御事とうちゟ
御うわさ申上候どのようなおいしい
おそばても私事は一ばん〳〵あなた様の
おそばがよろしく御さ候とうそ〳〵
らい月中ころにはちよとなりとも
御かへりをひとへに〳〵ねんし上まいらせ候
御出の其日ゟ御かへりをたのしみに
折くらしまいらせ候御てすきのせつ
一筆なりとも御へんしをひとへに〳〵ねんし上候
めでたくかしく



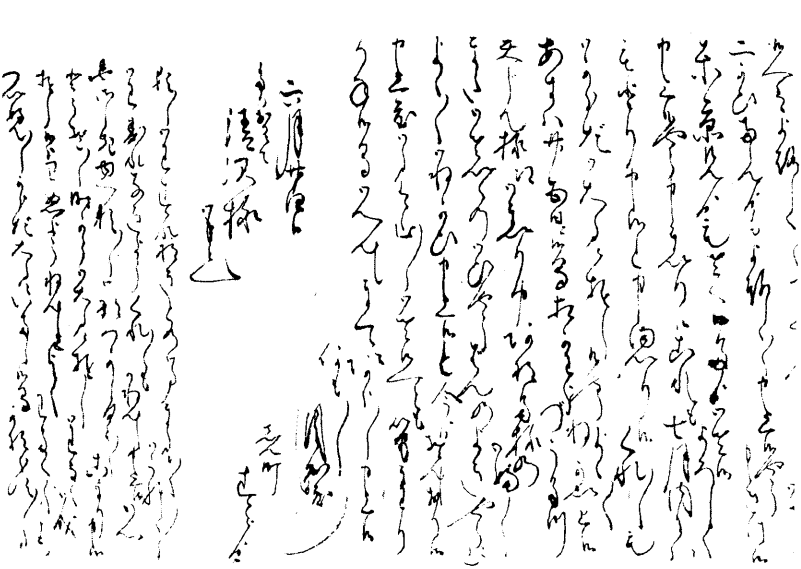
「書簡二」

かへす〳〵も火のようじん大事にいたし候間
かならず御あんし下されましく候又御手すきが
候はゝ御めんとうさまなから御たゞ御ねかい申上候以上

廿二日御したゝめ遊し候御手かみ同三日に
相とゝき御せわしき御中にて私までも
御文被下ま事に〳〵御うれしく〳〵御目もじ
さまの心にてはいけんいたしまいらせ候じせつ
から御あつさに相成候へとも御きげんよくいらせ
られ候との御事ま事に〳〵御目出たく
御うれしく御よろこび申上まいらせ候つきに
こゝ元御とゝ様御はしめみな〳〵そく才
にてくらし折候間かならず〳〵御あんし
下されましく候さやうに候へは此せつは
あなた様御せきはいかゝに候や何様ゞ
いやなあつさに候間御わるくわなきやと
御うわさ申折御あんし申上候しせつを
おくり候やうにと御申よこし御やすき御事
何なりとも御ほしき物候はゝ御申よこし
下されへく候御むねのわるいのわいかゝに候や
御あんし申上候とうそ〳〵御そく才のよう
御ようしん遊しとき〳〵には御ほよう遊はし



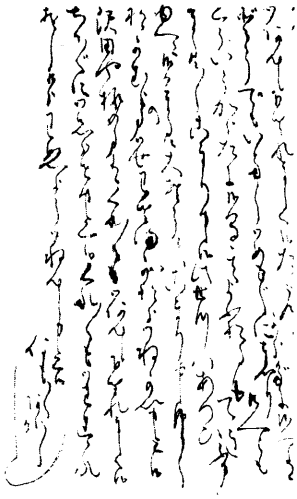
御きを御なぐさめなされ候やう御ねんし申上候
すこしのまもわすれ不申[15]あついにつけ
さむいにつけ御あんし申上候とうそ〳〵
おわるく御なり遊し候らわぬよう
くれ〳〵もねんし上候御とゝ様御かゝ様
の御事はかならす〳〵御あんし下され
ましく候ま事に〳〵御丈ふに候[16]て相かわらづ
夕方には一ぱいはじまり御さむしき御やうす
何成ともおさかなとおさけおば御とり
これはあなた様のじやと御よけ遊し
候て〻御あかり遊し候ま事に〳〵御うれしく
なみだか出申候これと申[17]もつねから
あなた様が御やさしきゆへとそんし上候
御両親様の御事はわたくし事大事に〳〵
いたし候間かならつ〳〵御あんし被下ましく候
沢田や様の御事もいろ〳〵御あんし遊し
御申よこしこれもこん月内にはきつと〳〵
御あけ候間これまた御あんし被下ましく候
御出遊し候とさつそく御しらせ申上候
御とゝ様〻も御へんし御出し候はつなから
何やらむた〳〵と御そんしとうりなされ
候へはよろしく〳〵申上候やう御申に御さ候



二かひ両しん[18]ゟもよろしく申上候やう申きけ候
東京兄[19]ゟもさく日たゟ御さ候よろしく
申上候やう申まいり候これも七月内には
もどり申候と申まいり候くれ〳〵も
御からだ御大事に遊し候やうよく〳〵ねかい上候
あすは廿五日に候間相かわらづうたつ
天じん様[20]え御まいり申あなた様の御ぶし
また御さいくの御ひやうばんのよきやうにと
よく〳〵御ねかひ申上候と今ゟそんしおり候
申上度御事は山〳〵御さ候へとも筆まわり
かね候間[21]御へんしまてにあら〳〵申上候
何も〳〵目出度かしく[22]

六月廿四日[23]　志ん町
たかおかにて　すゞゟ
清次様
御もとへ

猶〳〵御わすれなきとの御事ま事に〳〵御うれしく〳〵
御わすれなきようくれ〳〵も御ねんし申上候御心
やさしきゆへ猶〳〵御なつかしく〳〵こまり申候
とうそ〳〵時かう御大事に遊し御わるく御成
遊し候らわぬようねんし上まいらせ候わたくし事も
ついふん〳〵からだ大事にいたし候間かならす〳〵



御あんし下されましく候たゞのからだに候へは
どうでもいたし御めもじにまいり候へとも
こういうからたに候間(24)其よふな事もてき不申
ま事に〳〵こまり申候此せつはあつひ
ゆへに候かま事に大そうにこまり申まいらせ候
なかむらの事御せわさまがなら(ママ)御ねかい申上候
沢田や様の事はくれ〳〵も御あんし下されましく候
ちかゞ〳〵に御しらせ申上候くれ〳〵も御わすれ
遊し候らわぬよう御ねんし申上候
何も〳〵あら〳〵かしく

注

(1) 「なかむら」…今回紹介する書簡中では、「中むら」「なかむらのざんぎりさん」等の言い方で、この名は以後もたびたび出てくるが、現在のところ未詳である。

(2) 「沢田や様」…殿田良作「泉鏡花の実際と作品」(前掲)に清次の姉ますについて、「ますは慶応二年に金沢南町蠟燭商沢田嘉助に嫁し、沢田勇吉なる一子を、明治九年二月十三日出産しているのが、壬申戸籍に見えている。」という説明がある。おそらくこの書簡中、たびたび登場する「沢田や」も、この清次の姉の嫁ぎ先の蠟燭商のことであろう。

(3) 「こうさく様」…山川孝作のことか。山川孝作は清次と同じく加賀象嵌師で、『金沢銅器製造元記』には、清次と同様に金沢から高岡に出稼ぎに行った者としてその名が記載されている〈資料2〉参照)。また、新保千代子「鏡花新出書簡考――上京時をめぐる年譜への疑問――」(『鏡花研究』一九七四・八)中で紹介された上京中の鏡花の清次宛書簡文中に「向あはせの事故山川氏とハ表だけなりとまんまるくお交際の程申上候。」とある「山川氏」も、同一人物の可能性がある。

(4) 「御ちゃ上様」…清次の父、泉庄助のこと。

(5) 「屋なぎばし」…現、金沢市柳橋町。街道沿いに位置し、茶店が幾つかあり、団子・笹ちまきが名物であったという(『石川県の地名(日本歴史地名大系一七)』平凡社一九九一・九)。近世、中山道追分宿からの信州路、または中山道関ヶ原宿から日本海側の幹線街道を「北国街道(北国往還道)」と呼んだ。この北国街道の道筋で浅野川大橋を渡って卯辰町から大樋町を過ぎると郡方に入り、三ッ屋、柳橋、法光寺……と続いていく(同書)ことからもわかる通り、柳橋は大樋町よりも先の城下外の土地にあたる。

(6) 「御せが御もめ遊し」…『俚言集覧』に「ごせやく」で、「南部及び北越後にて、立腹のこと」とある。またこの他「後世をやく」という言葉は「世話をする。世話やく。」、「骨を折る。苦労する。」などの意味として使われることもある(『日本国語大辞典』小学館)。但し「後世がもめる」の用例は未見。

(7) 「ぶんさん」…不明。但し、明治十年、長谷川準也設立の「銅器会社」で職工棟取、水野源六が率いた五十一名の職工中の一人、友沢文太郎(田中喜男『加賀象嵌職人――米沢弘安の人と作品――』前掲)が、同業者で「しらさきや」での清次の様子を知っているということからも、この「文さん」に当るのではないかと推測できる。

(8) 「しらさきや」…高岡の銅器商の問屋。『金沢銅器製造元記』の記載などから「この頃、高岡には既に角羽勘左衛門、金森宗七のほかに伏見屋、大場屋、穴茶屋、白崎屋、研屋、黒田屋らの銅器商がいた」(『高岡銅器史』前掲)ことがわかり、彼らが「金沢の象嵌職人の技術の優秀なのを見て」、「極力高岡に招いた」ため、「金沢で失職していた職人が、大挙して高岡へ出稼ぎに来るようになったのである」(同書)。

白崎屋では山川孝次、泉清次、山川孝作、小浜弥太郎、水谷喜太郎、山川義右衛門らが働いていた。彼らの多くは間もなく金沢に帰ってしまうが、「たとえ短期間であっても、この時に高岡銅器業界が、金沢の加賀象嵌の名工を多数受け入れた影響は多きかった」という。明治六年八月、高岡の銅器商人金森宗七が、新たに金沢に「宗金堂」と称する銅器製造工場を設立するが、その仕事に泉清次、山川孝作ら当時の金沢金工職人のほとんど全員が参加している(同書)(「解題」及び〈資料2〉〈資料3〉参照)。

(9) 「何にに」とよむべきか。

(10) 「あ」の上の「一」は誤記と思われる。

(11) 「志ん町」…新町のこと。鏡花の生家は石川県金沢市下新町三十三番地(現、金沢市尾張町二丁目十二ノ一)にあった。

(12) 「六月二十二日」…書簡には年数が記載されていないが、「解題」でも述べたように、これは明治六年六月二十三日のことと推定できる。

(13) 「たかおか」…現、富山県高岡市。

(14) 「御はゝ様」…清次の母、泉きてのこと。

(15) この部分(「すこしのまもわすれ不申……」)から「猶々書」の前

の「何も〳〵目出度かしく」までの部分の翻刻が、春陽堂版全集で掲載されている。

(16) 「候」…春陽堂版全集の翻刻では「候」は脱落している。

(17) 「申も」…春陽堂版全集の翻刻では「ても」と翻刻されている。

(18) 「二かひ両しん」…すゞの父母、中田豊喜、ちよ、のことか。「壬申戸籍」によると中田豊喜は明治元年金沢へ妻子を連れ転住、同三年平民となり、新町に居住とある(「東京居住罷在候処明治元年御当地え妻子引連罷越同三年御改革に付平民に被指加新町居住」)(殿田前掲論文)。

(19) 「東京兄」…すゞの兄、中田孫惣のことか。笠原伸夫『評伝 泉鏡花』(白地社一九九五・一)に「文中(引用者注/春陽堂版全集一部翻刻によるこの部分)の東京よりたよりのあった兄とは、七月には戻るとあるから家業としての能楽の大鼓を引きついだ長兄惣之助のことであろう。俗名孫惣、明治十年七月四十歳で没している。」という説明がある。

中田豊喜には他に二子の男子あったが、次男は慶応四年九月十一日に死亡しており(名前は不明)、三男は宝生流シテ方、後の名、松本金太郎といい、松本弥八郎方へ養子入し、慶応四年には静岡に転住している(殿田前掲論文)。

(20) 「うたつ天じん様」…卯辰神社(卯辰天満宮。現豊国神社に合併)のこと。慶応三年九月二十三日に竣工し、その正遷宮の祭礼が七日間に亘って行われた。「天満宮御神幸行列略図」、「卯辰神社御遷宮御祭礼獅子」等から当時の「異常な興奮」ぶりがわかる(『金沢市史 資料編⑬(寺社)』金沢市史編さん委員会一九九六・三)。

また二十五は天神の吉数で(『金沢市史 資料編⑬(寺社)』前掲)、近世では各地で天神講を行う寺小屋も現われ、「寺子たちは二十五日に天満宮に参拝したり、寺小屋に掲げられた道真公の画像に向かって、『天神経』を唱えるなどして書道上達を祈った」ところもあったらしい(『日本民族宗教事典』一九九八・四)。

「その菅原道真を祀れる天満宮の亦少なからざるは、加賀藩主前田氏が道真を祖先となせるが為」(『稿本金沢市史 寺社編』(復刻)名著出版一九七三・七)とあるように、「金沢付近は天神信仰の盛んな地で」、「近郊の河北郡津幡町でも、明治頃は天神堂に粘土人形を飾っていたのが、後、掛軸になり、おそなえも天神のものだけは二五日まで飾」る風習があった(西山郷史「天神・人神・藩祖の信仰――都市型信仰の展開試論――」『都市の民俗・金沢』金沢民俗をさぐる会編・図書刊行会一九八四・一)。

(21) 「筆まわりかね候間」…春陽堂版全集の翻刻では、この部分は脱落している。

(22) 「何も〳〵目出度かしく」…春陽堂版全集の翻刻はこの箇所までに相当する。

(23) 「六月二十四日」…明治六年六月二十四日(「解題」参照)。

(24) 「こういうからたに候間」…すゞのお腹の中には、この時、鏡花がいた。鏡花は明治六年十一月四日出生(「解題」参照)。

[付記]
このたび松村友視氏に本資料の存在をご指摘頂き、翻刻するに致った。資料調査にあたって貴重なご助言を賜った秋山稔氏、吉田昌志氏、書誌、翻刻に関してご教示賜った関場武氏、伊倉史人氏、また貴重な資料を閲覧させて下さった金沢市立玉川図書館に、心より御礼申し上げます。

(にしかわ　あつこ)